

「水土里のカレッジミーティング」を開催

- 農地・水・環境の体験活動、幅広く熱心に意見交換 -

9月29日(土)、農村振興局・関東農政局は、埼玉県川越市の農地・水・環境保全向上対策を実施している伊佐沼地区を訪問し、大学生との意見交換会「水土里のカレッジミーティング」を開催した。

カレッジミーティングは、平成15年度から広報・広聴の取り組みの一環として、農業・農村に関心を持ち、農の体験等の活動を実施している大学生有志の参集を得て、日頃の活動を通じて感じ、考えていることについて、農林水産省の幹部職員を交え意見交換を行っているもの。

当日は、麻布大学、慶応大学、千葉大学、筑波大学、東京農業大学、東京農工大学、一橋大学、明治大学、早稲田大学の9大学の各サークルから20名の大学生、農村振興局から齋藤企画部長、関東農政局から廣瀬整備部長、埼玉県から船田農村整備課長、平井川越農林振興センター副所長、川越市永瀬主査、活動組織「伊佐沼周辺田園環境保全組合」から三上会長、荒川右岸用排水土地改良区の細野理事長らが出席した。

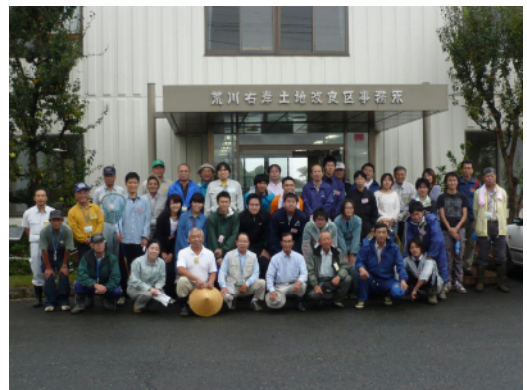
午前中は、生憎の雨であったが、地元の保全組合の方々の指導のもと、ため池周辺の草刈りと土着菌を利用した水質浄化の体験活動を行い、その後、四つ手網による伊佐沼の生きもの調査を行った。作業後は、地元の素材を使った料理がふるまわれ、そのまま車座となって意見交換会を開催した。

意見交換会では、まず学生から共同作業の感想を含めて各サークルの活動内容の紹介。「機械での草刈りは初体験で、思った以上に大変な作業。草刈り面積がとてども広く管理に苦労されていると感じた。」「水質浄化の取組は、大変参考になった。持ち帰って使ってみたい。」など感想が述べられた。地元代表者からは、沼の蓮が少なくなってきたことがキッカケとなり、水質浄化に取り組んだことや水質浄化に関係する多方面の機関や事業者に積極的な働きかけを行っていることを紹介。学生からは、農業の後継者問題、食の安全、生産者と消費者に食に対する意識のズレがあることなど幅広い意見が出された。さらに農家を目指す学生からは、農業への将来像が熱く語られた。齋藤企画部長からは、公と私という社会の関わりの他に「共」という概念が必要であり、地域一体で活動に取り組むことの重要性や小学生が農家民宿を利用した宿泊体験活動を展開するため、受入体制を整備することなどに触れ、農山漁村を活性化する取り組みを紹介した。

その後、学生達は、川越市の農業ふれあいセンターの市民農園、農産物直売所、菅間頭首工、古谷上排水機場を視察。排水機場では、滅多に見ることのない機場の中の制御施設や大きなポンプを目の当たりにし、高い関心を示していた。



- 伊佐沼周辺での草刈り体験 -



- 活動体験後に記念撮影 -



- 地元の方も交えての意見交換 -